

日中国交回復期の愛知大学と中国との「新証言」

——穂積七郎代議士追悼文ほかより——

佃 隆一郎

〈大学史事務室〉

ここにあげる史料は（書かれた時期としては新しいが）1996（平成8）年9月に刊行された追悼文集『穂積七郎先生を偲ぶ記 東三河の心』（同記出版委員会編集発行、非売品）32-37頁での、創成期の本愛知大学に在籍していた伊藤^{かずのぶ}般展氏¹⁾が寄稿した一文である。そこには日中国交回復（1972年）の時期に、伊藤氏が穂積七郎元代議士（1904-95、現在の愛知県新城市能登瀬の出身、旧姓鈴木）とともに愛知大学と中国との学术交流の実現に“一役買った”動きをしていたことが、前年逝去した穂積氏への追悼という形で述べられているのであり、以下該当文を別掲して（漢数字を算用数字に改めた以外原文のまま。注記は文中に〔 〕で補うとともに、文章的な注釈は本文でのものと併せて文末に掲示）、その上で『愛知大学五十年史』などでの公式な本学史・記録での関連記述と照合することで、この“新証言”を検討してみることにしたい。

なお、別掲史料のとりわけ前半部は、愛知大学とは無関係な記述が多いが、近現代の東三河地区における有力者の一人であった穂積氏の地位や業績を説明しているものとして、参考まで含めることにした。ただし、そこで述べられている穂積氏個人や時代全体への見方や評価は、あくまでも伊藤氏個人のものであることを留意されたい。

〔史料〕

我心の師、穂積七郎先生を偲んで

豊橋市 伊藤 般展

昭和初期から平成まで常に若々しく革新の闘将として全力投球され意義ある人生を全うされた穂積七郎先生が逝去されて早や半歳の月日が過ぎ去ろうとしている。私は終戦間もない、愛知大学の草創期に、一人の中国留学生と下宿を共にし学んだ時、戦争の惨劇を聞かされた。以来、生涯を日中友好運動に身を捧げようと腹に決めた私にとって、穂積七郎先生は良き指南役であり、頼りになる後だてでもあった。

穂積先生の祖父鈴木元貞氏は幕末京都における有名な蘭方医小森玄良の門人として名高い在村の知識人であり、穂積先生からよく聞かされるお話であった。父鈴木麟三は山林経営者であり、地域の殖産振興に尽力されるかたわら県会議員、衆議院議員として活躍された有名な政治家であり、鈴木家は地域の名門であった。穂積先生は鈴木家の元来の祖、穂積氏の姓を継がれたが、東三河におけるエリート中のエリートであることにかわりがない。

穂積先生は、豊橋中学〔現 時習館高校〕から七高造士館に進学され、血気盛んな薩摩隼人と交友するなか、おのずと国士としての風格を身に付けていかれたとお聞きした。第七高等学校から東京〔帝国〕大学経済学部に進まれ、卒業後商工省のエリート官僚の道に就職されたが、先生の激

しい気性は出世街道を一直線の道を進むより、むしろフリーな言論人として著述の道を選ばれた。丁度この時期、日本は不況に喘ぎ、日本領土拡張政策は満州事変に端を発し、戦火を中国大陸全土へと拡大し、遂には全世界を相手とする大東亜戦争に突入してしまった。この不幸のさなか、軍部は政枢を独裁し世をあげて戦争を謳歌するという不幸な時代を迎えることになり、厳しい軍政のもと一億オール、イエスマンの時代を迎えることになった。この社会情勢をさめた眼で時の移り行くを眺めていたのが、兄鈴木五一氏と若き日の穂積七郎先生のご兄弟であった。しかし、戦争は日本軍部の予想通りには進まず、やがてサイパン陥落を期に戦局は日に日に日本に不利な状況に押しやられると東条英機大将〔首相兼陸軍大臣〕は陸軍参謀総長も兼攝し、正しく東条幕府の出現というニュースに両先生の怒りは爆発した。この怒りは、東条内閣打倒が画策され、そのシナリオが綿密に練り上げられたと聞く。ドラマは筋書通りに進められ東条内閣は退陣することになったと聞くが、関係者は口を固く閉じ、未だ歴史の頁にこのことを見ることはない²⁾。

穂積先生のご健在のうちにこの東条退陣の秘話を確認しておくべきだった。

穂積七郎先生は戦後郷里に帰り、昭和21〔1946〕年4月10日執行の第22回衆議院総選挙に立候補し、53,486票を得て見事当選された。

昭和21年8月、日本を民主化^(ママ)のための日本国憲法制定にあたり、国の自衛権をめぐる政府見解について穂積七郎先生は納得されなかった。

もう戦争はこりごりだ。一億総懺悔の時代であった。他国の侵略を受けても無抵抗でよいのか。民族主義者の穂積七郎先生は断乎否とする青票を投ぜられた。青票の数は八票、穂積七郎、細迫兼光、柄澤とし子、志賀義雄、徳田球一、高倉輝〔^(ママ)テル〕、中西伊之介、野坂参三各議員であった。真摯な先生は革新議員として人気は絶頂であった。政治家としてその活躍が大きく期待された時代であったが昭和22〔1947〕年のある日〔公職〕追

放令にかかり³⁾政界を隠退され浪々の生活に入られた。

その後追放が解除されると昭和27〔1952〕年10月1日執行の衆議院総選挙に復活をかけ無所属で立候補された。

私が先生の選挙のお手伝いにうかがった最初の選挙であった。

朝鮮戦争が勃発し、アメリカは日本を軍事基地化し、日本をアメリカの極東戦略の一翼を担わせるために再軍備を命じてきた。時の政府は新憲法制定時あれほど軽視した自衛権を正面に押し立ててきた。

先生の選挙公約の中に再軍備、外地出兵反対、平和憲法擁護、中国を含む全アジア〔と〕の貿易の打開が明示されていた。

先生の世界を見る眼がいかに的確であり、歴史の流れに対し、いかにぬきん出た考え方の持ち主であるかを知ることができる。しかし、この時の総選挙は準備不足のために落選となった。

翌昭和28〔1953〕年4月19日執行の衆議院議員総選挙に先生は日本社会党に入党し、公認を取り付けて立候補された。この時は見事当選の栄をかちとり、返り咲きを果たされた。選挙公約の中にも、アジアに対する外交政策、特に中華人民共和国に対する経済交流にも積極的な姿勢を打ち出された。

中国から安い石炭や、鉄を購入できず、高い米国産に頼るために電気、ガス、鉄道運賃も高くなり、勤労者の生活が苦しくなる。又、中国大陸で欲しがっている繊維品などの輸出が統制されているのが日本の中小企業不振の原因ときめつけて日中経済交流の必要性を強調された。

冷戦下にあってアメリカにもソ連にも偏することなく、アジアの自主中立を説かれていた。最後に日本が社会民主主義の道を選び、大衆の革新が行われることこそ、真の自衛が達成されると結論づけを行っておられた。以来先生の衆議院での活躍は平和同志会の中核として平和、自由、独立を強調しながら日中友好のラインを強くおし進めら

れた。

1972年の日中国交回復直前、穂積七郎先生は、周恩来総理から密かに日中国交回復の話の連絡を受けたと話された。この連絡を田中〔角栄〕総理に伝え、田中総理の依頼も受け、国交回復の根回しのため訪中され周恩来総理と会談された。出発の3日前に穂積先生から是非逢いたいとお電話をいただき、来豊された先生をお迎えし、豊橋市内と南設〔南設楽郡〕を一緒に廻った。夜、東京にお帰りを豊橋駅にお見送りするとき先生は「周総理に何かお願いすることはないかね」と尋ねられた。私は「愛知大学の学術交流の実現に協力してほしい」とお願いした。

当時愛知大学の学長であった細迫〔朝夫〕先生に早速報告し、親書を書いていただいた。これを周総理にお届けしていただくために2人で羽田空港に穂積先生をお見送りした。先生はお約束通り、これを周総理にお渡しくださり1973年6月周総理の母校、天津の南開大学に愛知大学が学術交流団の派遣を実現することができた。愛知大学の訪中団は中国語研究の泰斗鈴木沢郎教授を団長とする4名であった。この経緯については細迫元学長以外御存知ない穂積先生の愛知大学日中交流の功績と思う。私もこの時を切っ掛けとして周総理にお手紙を差し上げる光栄に浴したのであった。1990年10月周総理の故郷である江蘇省淮陰市に遺徳をしのんで周総理芸術記念館が設立された。1990年10月15日オープンする時、人民政府より是非一幅揮毫作品を出品するようにと要請があった。穂積先生のご恩返しと考え恥をしのんで「興国愛民盡聖道」と書して寄贈したところ、現中日友好協会会長、孫平化先生⁴⁾の作品の隣に並べ展示下さってあった。

館長先生にお伺いしたところ日本人の作品展示は私一人とお聞きし大変恐縮したしだいである。これも総べて穂積先生のお陰により、この上もない栄誉をいただいた。

又、私にとって穂積先生を偲ぶとき忘れることができない今一つの事があった。先生から「あな

た！ 僕が土地を提供するから中国研究所を設立してはどうかね。豊橋には愛知大学がある、スタッフも揃っているし、関東に一つある、関西に今一つある。中部にも一つほしいですね。」と夢のような提案があった。予定地は豊橋駅西の超一等地であった。早速当時の豊橋市長河合陸郎先生にお話をすると、積極的な援助のお約束を下さった。又、愛知大学の同窓会の会員の皆さんにも正しく東奔西走いただいた。しかし、母体となる愛知大学の諸事情により見送りとなってしまった。今では、その土地に立派なビルが他の目的で建設されている。今その建物を見るにつけても先生のご好意を実現出来なかった私の非力が悔やまれる。

昭和58〔1983〕年4月の統一選挙に横田平先生が日本社会党公認候補として愛知県議会議員に出馬された。私も彼の絶対当選のため随分走り廻った。5人定員に6人が立候補し、いずれも政党公認であり文字通り少数激戦の苦しい選挙戦となった。この苦戦を勝ち抜くために穂積先生に応援をお願いすることにした、先生は後輩のために、又、社会党が地域市民に貢献するためにと応援にかけつけて下さった。穂積先生の演説はいつお聞きしても格調高く聞く人の心をとらえる名演説であった。

私が公式の場で先生の講話を拝聴したのはこれが最後となった。激動の昭和の政治舞台に反骨精神をつらぬき通した穂積七郎先生、あなたこそ三河人として又、政治家として、最もふさわしい方であります。生涯をとおして日中友好をすすめられた偉大なる功績を心から讃えご冥福をお祈り申し上げます。

〔史料終〕

このように、この史料からは愛知大学に関する、
①細迫朝夫学長（故人。在任1970.5-72.2）の時期、本学出身者有志の伊藤般展氏が仲立ちする形で、学長から周恩来総理への親書を託された穂積七郎代議士が訪中してそれを渡したという、愛大と中国との学術交流を実現す

るための働きかけがなされ、のちの学術交流団派遣実現につながった。

- ②豊橋市に中国と元来関係の深い愛知大学があることから、関東・関西に続く3か所目の「中国研究所」を豊橋駅近くに設立する構想を穂積代議士が提案し、市長や同窓会も協力の姿勢を示したが、母体となる愛大の諸事情により見送りになった。

という2つの注目すべき記述が見られるのである。

管見の限り、愛知大学当局が編纂・編集した『年史』等刊行物では、②に関する記述を見出していないが、①については1年後の学術交流の実現は事実であり（1973年6月、最初の学術訪中団が天津市の南開大学を訪問）、重要な証言であると考えられる。

これを裏づける記述としては、『愛知大学五十年史 通史編』（2000年）では、学術交流実現の契機として「かねて郭沫若氏に対し『中日大辞典』編纂関係者を中心とする代表団の訪中を希望していたところ、天津市の南開大学が受入れ校となり、北京大学・復旦大学（上海市）の3校で開催する辞典座談会に招聘された」（453頁。カッコは原文、以下同）と記してあり、さらに別の箇所には「1971（昭和46）年9月、細迫朝夫学長は辞典関係者の訪中への熱意をうけ、折から日本中国友好協会代表団員として訪中する穂積七郎前代議士に、増刷されたばかりの辞典第二刷版に添えて愛知大学学術代表団派遣要望書を託し、郭沫若氏へ届けてもらった」（301頁）⁵⁾ことで、翌72年1月に細迫学長宛てに中国日本友好協会より、受入れを検討すると記した返信⁶⁾が届いたと明記されているのであるが、周恩来に関する記述はない。郭沫若は当時（愛大が『中日大辞典』初版本1200冊を贈呈した）中日友好協会の名誉会長であったが、伊藤氏の証言にある通り周恩来という“当時（毛沢東に次ぐ）中国ナンバー2の存在”にも関わっていたことであったのか、親書が郭へのものとは別に周にも書かれて届けられたのかは、ここでは判断

できかねるところである。

〔追記〕この史料は、浅井敦愛知大学名誉教授が惠贈して下さったコピーをもとにしているが、本稿作成後に浅井氏より、伊藤般展氏に直接会って話を聴くことができたとの連絡をうけた。

それによれば伊藤氏は、先の①については、

- ・穂積氏が周恩来と会い細迫学長の親書を手渡した時、立ち会ったのは孫平化氏（註4参照。この時は中日友好協会秘書長）であり、また帰国後「確かに周恩来総理にお渡ししました」と細迫氏に報告した時、桑島信一教授（故人）が立ち会った。
- ・「親書を」という提案に細迫氏は、突然のことであり、また当時文化大革命のさなかにあった中国の、日本への政治的・社会的な影響などの諸事情を配慮し、当初ちゅうちょしたが、「愛知大学のために」という私（伊藤氏）の意見も聞いた上で自ら判断し、急いでしたためて下さった。親書は細迫氏と2人で直接穂積氏に羽田空港でお渡しした。
- ・記憶では、この時の穂積氏の訪中は1971年の5月ごろであり、その目的ゆえに、代表団員としてではなく、お一人（単独）であった。また、これら一連のことは『愛知大学五十年史』での記述とは別物だと思う。

と証言されたとのことである（②についても関係者の名前をあげて下さったとのことであるが、ここでは割愛させていただきたい）。証言中の「訪中時期」については田中角栄内閣の成立以前にあたるため、史料と合わない点も生じてくることになるが⁷⁾、『五十年史』などで従来述べられていた“郭沫若ルート”とは別であったとする点はきわめて重要となろう。

まずは、これらの証言が愛知大学史上の新たな問題提起として各方面で検討されていくことを、（浅井・伊藤両氏に衷心より感謝の意を表しつつ）ここに念じて区切りとしたい。

註

- 1) 伊藤般展氏（通称「伊藤はんでん」氏。愛知大学の「推薦校友」として同窓会に在籍）は現在豊橋地区日中友好協会の会長を務めていて、2005年の王毅中国大使の愛大訪問や06年の秦始皇帝銅車馬レプリカ（NHK 保有）の愛大への長期貸与などの実現に尽力した。
- 2) 穂積七郎は1944（昭和19）年、反東条内閣工作のかどで検挙されている。
- 3) 公職追放の理由は、「反占領政策の言動および、戦時中、言論報国会理事であったこと」（豊橋百科事典編集委員会編『豊橋百科事典』、2007年、豊橋市、659頁）とされている。
- 4) 当時中国日本友好協会の会長であった孫平化氏はこの史料が出されたのと同年の1996年（その翌年没）、愛知大学創立50周年記念日中国際シンポジウムに招かれて日本語で講演を行なった。また、1987年に病床にあった本間喜一愛大名誉学長（この年没）を孫が見舞った際贈った揮毫「名高北斗 寿比南山」が愛大創立60周年の2006年、本間氏の実娘より愛知大学に寄贈された。（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『愛知大学創成期の群像 写真集』愛知大学東亜同文書院ブックレット別冊、2007年、51頁参照）
- 5) この引用文に付されている「註」の説明文には「1971年9月26日付朝日新聞名古屋本社版第一面トップに『日中親善へ新風、初の大学交流 愛大が視察団計画 将来は留学生も』の見出しで報道された」（愛知大学五十年史編纂委員会編『愛知大学五十年史 通史編』、2000年、319頁）とある。その新聞記事では、穂積氏の訪中は9月27日とあり、また穂積氏の「訪中したら郭氏のほか要人にも積極的に話し、実現に努力する。文革〔文化大革命〕の成果を〔中日大辞典に〕正しく取入れることは何にもまして重要なことと思う」とのコメントが紹介されている（ちなみに、この記事を書き注目された東郷茂彦記者は、太平洋戦争開戦・終戦時外相だった東郷茂徳の実子にあたる）。
- 6) この書簡および、註4新聞記事の写真は同前書302頁のほか、同編纂委員会編『写真集 愛知大学の歴史』（1996年）84頁にも掲載されている。
- 7) 可能性としては、史料での「田中総理」はあくまでもイメージ上の呼び名であって、田中角栄が首相就任前から動いていたことも考えられよう。なお、田中は第三次佐藤栄作内閣の後半期（1971.7-72.7）に通産大臣（当時）を務めていた。